

真光寺川を歩く

山口拓郎

8月2日(日)午後、エコネット有志で真光寺川を探索した。

松尾、徳井、卯月、柏木さん、それに私の5名の一行である。

徳井さんは「川と水をきれいにする市民会議」で活躍されており、松尾会長が特に依頼し参加して頂いた。田中さんが都合で参加出来なくなつたのは残念だつた。

「歩く」ことになつたのは総会で私が次の意見を述べたのがきっかけだつた。

「真光寺川は私の散歩コースの一つです。私達は子供時代川を遊び場として育ちました。今、川に子供達の姿はありません。子供達の「荒れよう」が社会問題になっています。

川を歩いていると弁当の食ベガラやペットボトルが投げ込まれていることがあります。真光寺川のクリーン作戦を子供達と展開することによつて、子供達が川に親しみ環境問題に目覚めてくれたら、どんなにか素晴らしいことでしょう。」いわば私の夢である。

この発言を松尾会長が覚えていて下さり7月度推進連絡会議で取り上げられた。

「とりあえず、一度歩いてみましょうや」松尾会長の一言で「歩くこと」が決定した。

鶴川駅①に午後1時半に集合。油照りと言うのだろう、晩夏の日射しは容赦なく照りつけていた。小田急の線路を越えて鶴見川へは数分である。

橋を渡ると川崎市麻生区岡上である。川面は陽炎が立つように少し煙て見えた。

陸橋②、岡上橋③を経て、鶴見川と真光寺川の合流点、精進場④に至る。途中投棄されたゴミを散見、なかには自転車の残骸もある。

一行、階段を下つて親水場へ降り立つ。数日前、多摩地区で記録的集中豪雨があつた。岸の葦が川下に向つてなぎ倒されている。いつもは穏やかな流れも時折は凶暴な一面を見せることがあるようだ。コンクリートの石畳も何枚かめくれ剥がれていた。

精進場⑤を渡ってよいよ真光寺川へ入る。合流点は二つの流れを突堤で仕切っている。時折はこの上で釣り糸を垂れている人を見かけることがある。

「思ったよりきれいですね。」

松尾会長の第一印象である。

この辺りは住宅の密集地帯の下真ん中、いつもはゴミが浮いているのだが増水で流されてしまったのだろうか。

再び神奈川県から東京都へ。河川管理の管轄を示す標識が立てられている。小間切れな管理体制である。一つの河川を一貫して見る体制は作れないものだろうか一行の中からそんな意見が出ていた。

小田急線の下をトンネルで潜り抜け矢崎橋⑥へ出る。ここで



【鶴見川と真光寺川の合流点精進場にて】

(柏木夏彦氏撮影)

通称「世田谷街道」と交差する。幹線であるだけに車の交通は引きも切らない。日射しは益々強くなってくる。柏木さんから「もうすこしゆつくり歩こうや」と声がかかる。河床は大きな岩盤になつており水はかなり透明である。白鷺が優美な姿を水に映している。かるがも親子も悠々と遊泳を楽しんでいる。かわせみの影がよぎり、柏木さんが慌ててカメラをもつて追っかけた。

矢崎橋⑥と能ヶ谷橋⑧の間地点辺りに真光寺川唯一の親水場⑦が設けられている。堤防にそつて憩いの場があり、浅い池の上に藤棚が涼しい木陰を作っている。近所の少女達だろうか、お喋りに余念がない。我々も近くのコンビニで仕入れたアイスクリームで涼を取りながら

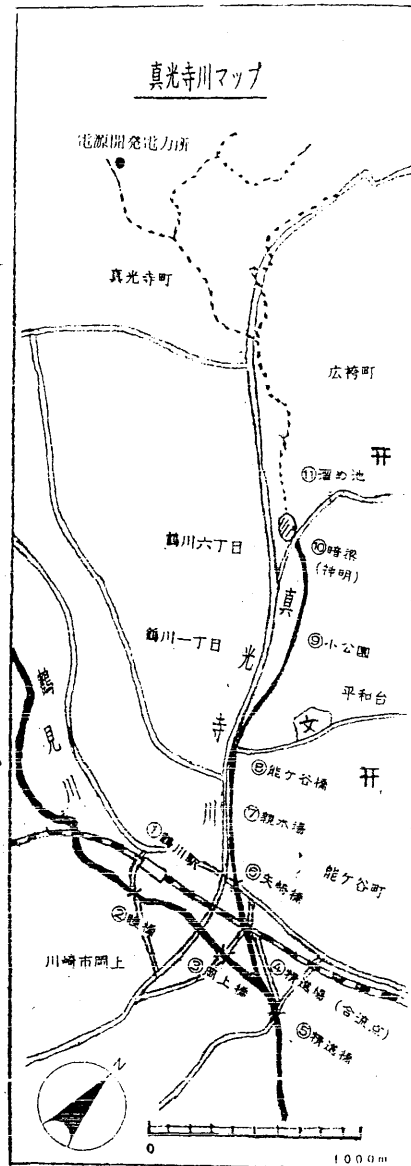
服する。このあたり一面の桃畑で春にはのどかなものだつた。開発の波は容赦ない。ブルトーザが土を掘り返してその面影はない。僅かに残された森の間から能ヶ谷神社の赤い屋根が見える。その先は別の開発区域で樹木が伐採されて剥き出しの土地が見えている。

能ヶ谷橋⑧で平和台へ向かう道路と交差する。坂の上に鶴川二小の白い校舎が見える。この辺り1年前まで丘陵に抱かれた緑の田圃だつた。ある日突然一帯に木杭が打ち込まれて囲まれてしまった。ここでも矢張り大規模な開発が始まったのだ。流石に規制は強化されているのだろう、柵の間から建設中の大きな下水処理場が見える。嘗て田畑を潤した川は今や排水の通路になつてしまったのだろうか。

更に数百メートル進む。川を挟んで左右に少し距離を置いて小公園⑨が造られている。一行には極めて不評だつた。川縁にありながら水に接してない！卯月、徳井さん等は憤懣やるかたない様子、川への思いは深いのだ。

やがて神明、此処で真光川は暗渠⑩にぶつかる。暗渠⑩は栗木への道路を隔てて溜め池⑪に通じている。一帯は住宅供給公社の広漠たる開発地区である。この池は調整池の役割を果たしているのだろうか？開発地区の空き地の間に住宅がポツポツと散見される。パブルの爪痕であろう。まるで砂漠だ。何故、狂つたように開発に走るのであろうか？

丸太のゲートが閉ざされていた。委細構わず針金を外して水辺に出る。周囲300m程あるうか。夏草が岸辺を覆い水は濁み暗緑色に光っている。水底に何やら妖怪でも潜んで居そうな気配である。水面を低く鳥が飛び交っている。「かわせみだ。」「いや、つばめだ。」と暫く一行の間で品定めが続いた。



徳井、卯月、柏木さん等がこの先の真光寺川の行方を探した。然し、遂に見当たらなかった。真光寺川は忽然と消えてしまったのだ。地図の上ではまだその半ばにも達していない。広袴、真光寺の谷戸を遡り、幾重にも枝別れして拡がり、龍が翼を拡げたように奥の奥まで迎れる筈なのに……。全長8 Kmは儼にあったであろう。残されているのは高々3 Km弱に過ぎない。

新武蔵風土記稿によると「古、真光寺と号せし古刹あり。故にこの村名おこれり。」とあり、又別の伝承に「池には青龍がいる、鱗が真の光をはなつている。」と記してある。この川の名の由来はここにある。川は谷を潤し豊かな稔りをもたらしていた。

蛍が飛び舞い清流には、どじょう、うぐい、ふな、うなぎ等が棲息していたという。

S30年、西東京変電所が誘致され、S35年には団地開発が開始された。開発により真光寺川は生活排水に汚染され悪臭を放つドブ川に化したことがあるという。

漸く下水道の整備も進み水質の汚濁も収まり、魚や鳥達も還って来つつあるようだ。然し真光寺川の喪失してしまった部分は決して蘇ることはないだろう。いまや满身創痕の青龍である。

駅前に戻りビールで喉を潤した。「とりあえず水質検査やマップ作りから始めましょうか」松尾さんの言葉が、この日の結論だった。

夏の日もようやく暮れようとしていた。軽い疲れに満足を覚えながら散会した。